
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 188

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3741. 夢の続きと創造的狂気
- 3742. 神聖なものを呼び覚ます教会旋法
- 3743. 奉仕と霊性の具現化へ向けて
- 3744. 小川に沈んでいく二人の友人
- 3745. 自分にとって最適な就寝時間
- 3746. 固有の観点と盲点:前超の虚偽
- 3747. ゆっくり接すること:スマートコントラクトの普及を祈って
- 3748. 霊性と死
- 3749. オランダが舞台となる二つの夢
- 3750. 不朽のものにするために
- 3751. 輝く世界の中で
- 3752. 鍬と鋤の夢
- 3753. 一昨日のスーパーでの何気ないやり取り
- 3754. 創造エネルギーの減退と回復
- 3755. 観察と振る舞いの変化
- 3756. 今朝方の夢
- 3757. 睡眠と活動エネルギー
- 3758. 粉雪の舞いと発達
- 3759. この世界に真にあること:美的感覚の涵養
- 3760. ニコライ・メトネルのピアノ曲を聴きながら

今日一日分のコーヒーを入れ始めた。先ほど、今朝方の夢について書き留めてみたところ、思っていた以上に夢を書き出すことができた。書き出す前は、あまり夢について覚えていないと思っていたのだが、書くことが何らかの刺激となり、随分と夢について書き出すことができた。書くことには、想起力が含まれるのかもしれない。つまり、書くことは、私たちの内側を刺激し、眠っていた事柄を外側に表出する力を持っているのかもしれないということだ。

そういえば、先ほど書き留めた以外にも、何人かの友人と、開放的なレストランでランチを共にしていたことを思い出した。私たちが店に入った時は、ちょうど昼食どきであり、店内が混んでいた。だが幸いにも、ちょうど人数分の席が空いていた。ただし、その席だと全員が顔を合わせて話をするのが難しく、少々不便に思っていた。

するとすぐに、近くの団体客がいなくなり、私たちは彼らが使っていた席に移動することにした。そこで会話を楽しむというような夢を見ていたことを思い出す。やはり、書くことは、私たちに自己発見を促すようだ。書かれるまで姿を見せないものが私たちの内側にはある。そして一度それについて文章を書いてみると、それは再び新たな未発見事項を引き連れて、また新しい事柄をこちらに開示してくれる。そうした現象が起こる起点には、書くことがある。書くことは、自己発見を促す実践であり、内側に眠っている自己の側面を開示し、さらにはそれを育むことにもつながっている。今朝方の体験を通じて、そのようなことを思わされた。

今日もまた、探究活動と創造活動に励む一日としたい。自分のライフワークに打ち込むためには、時間の流れがいびつな速さを持つ場所で生活をしてはならない。都会ではなく、自然を感じられる静かな場所で生活を営んでいくこと。それは、ライフワークを着実に進めていくための必要条件である。

昨夜、自分の口から、「創造的狂気」という言葉が生まれた、この言葉は、自分にとってとても大切な言葉だと改めて思う。創造的狂気に取り憑かれることと、自らの真の生を生きていくことは同一なのではないかと思えてくる。創造的狂気に取り憑かれることは、自らの宿命を引き受けることであり、

この人生に与えられた役割を引き受けることでもある。そうしたことを考えてみると、自分の中で芽生えつつある創造的狂気をいかに守り、いかに育んでいくかが重要であることがわかる。

昨夜も考えていたが、私が日本に戻ろうとしないのは、日本で生活をする、日本人である私が持つ創造的狂気がしぼんでしまうからなのだろう。欧州での生活を始めてからしばらくの間は、数十年後のどこかで日本に戻り、そこからは日本で生活をしようと考えていた。だが、今となっては、もう日本で生活することはないのかもしれないと思い始めている。それは、自らが持つ創造的狂気を死滅させないためであり、それを育て、開花させるためには、日本の外で生活を営み続けることが不可欠であるということが分かり始めているからだ。

今日もまた、自らの創造的狂気を育む一日になるだろう。フローニンゲン:2019/1/28(月)06:45

No.1620: Tranquil Ripples

Today that looks like tranquil ripples is approaching the end. I wish tomorrow to be the same as today. Groningen, 18:00, Monday, 1/28/2019

3742. 神聖なものを呼び覚ます教会旋法

時刻は午前10時を迎えようとしている。まだ雨や雪が降っておらず、辺りはとても静かだ。

灰色の雲が空全体を追っているが、それほど不気味な雲ではない。天気予報では、もうそろそろ雨か雪が降ってくるとのことであるが、それが当たるのか外れるのかを確認することが楽しみだ。

裸の街路樹が、冬の風に揺れている。そういえばここ数日間は、街路樹に意識を向けることはあまりなかったように思う。目の前の裸の街路樹が再び青々と茂る日が来るまで、私はまたゆっくりと歩いていこうと思う。今日の前には存在していないはずの新緑の姿が想像できることに改めて驚く。人間の想像力は計り知れないものがある。さらには、あのような輝かしい緑をつける生命力が、今日の前に見えている裸の木に存在していることも驚くに価する。このリアリティにおいて、私たちの目に見えていることなどほんのわずかであり、無数の事柄が私たちの目には見えない形で存在している。そうした目には見えないものを、想像力を働かせて見つめようと試みることを忘れてはならない。

今日は午前中に、協働者の方とのオンラインミーティングがあった。ミーティングを終え、昼食までの時間を再び自分の取り組みに充てていく。具体的には、昨日から読み進めている“A Concise Explanation of the Church Modes (2018)”の続きを読み進めていく。教会旋法に関する理解を徐々に深めていきたい。

昨夜本書を読んでいると、教会旋法に関してこれまで私が知っていた七つのもの以外の種類が存在していることを知った。また、私が一番興味深く思ったのは、なぜそれらの作曲様式が教会音楽で使われたのかという点だった。想像するに、教会旋法の一つ一つには、霊的なものを具現化させる力、ないしはそうしたものを媒介させる力があつたのではないかと思う。もちろん、教会旋法を活用したからといって、そうしたことが実現されるわけではないのだが、教会旋法が活用されていた当時のことを想像すると、それらの手法は間違い無く、神聖なものを呼び覚ますために活用されていたのではないかと思う。

私が教会旋法に着目しているのは、まさにこの点にある。教会旋法を通じて、あちらの世界のものをこちらの世界に降ろしてくること、さらには、こちらの世界のものをあちらの世界に高めていくことを行っていきたいという思いがある。前者はアガペーの側面を帯びており、後者はエロスの側面を帯びている。教会旋法を積極的に活用した作曲家の仕事には、これからも関心を持ち続けていく。

一時間ほど上記の書籍を読んだら、昼食前にもう一度作曲実践を行いたい。その際には、エマニュエル・シャブリエの曲を参考にしていく。

今朝方ふと、私は楽器を演奏した経験など一切なく、作曲に関しても学術機関でトレーニングを受けたわけではないことを踏まえて、自分はどこかハイハイをせずに突然歩き始めた幼児のように思えた。それゆえに、歩く過程の中で何度もこけてしまうことは必然だろうし、歩行に関する基礎を絶えず固めていく試みを続けていく必要があるだろう。フローニンゲン:2019/1/28(月)10:12

No.1621: A Greeting for Tomorrow

It's time that I can hear a gracious greeting for tomorrow. Groningen, 20:57, Monday, 1/28/2019

3743. 奉仕と霊性の具現化へ向けて

時刻は午後の七時半を過ぎた。穏やかなさざ波の音が聞こえてくるような一日が終わりに近づいている。明日も今日のような日であることを願う。

振り返ってみると、今日もまた充実感で溢れるような一日であった。日々をこうした流れの中で過ごしていこう。それが自分の人生を歩むことであり、自己が人生と完全に一体化していることを示している。

今日も読むこと、書くこと、作ることで彩られた一日だった。それらの活動は、この世界への奉仕であるとみなすことができる。いつからかそのように思うようになった。もはやそれらの活動に私心が挟まれる余地はなく、無私の状態でそれらの活動を営むことができている。だからこそ、これほどまでに日々が充実感で満たされているのだ。

自分がなす探究活動と創造活動は、奉仕活動と同義となった。何かに仕え、何かのために仕えていくこと。それをこれからも続けていく。

今日はこれから、一日を締め括る作曲実践を行いたい。過去の日記の編集が順調に進んでいるのと同様に、作曲実践も毎日継続して行なわれている。

本日最後の作曲実践が終われば、今夜は様々な楽譜を眺めることにしたい。絵画の傑作を眺めることによって自らの感性が育まれていくのと同様に、優れた音楽作品の楽譜を眺めていくことによって音楽的な感性を涵養していきたい。

楽譜を意識的に眺めることと、何気なく、分析的な思考を挟まない形で眺めることを組み合わせていく。徹底的に気づきの意識を与え、言葉にしていく形で楽譜を眺めるのと、楽譜が開示する音楽世界の美を自分の存在の奥に感覚的に流し込んでいくためにぼんやりと眺めることの双方を行っていく。それらをこれからも継続させていく。

今日は午前中に、教会旋法に関する書籍を読み進めていた。“A Concise Explanation of the Church Modes (2018)”の初読を終え、“Chorale Harmonization In The Church Modes (2018)”を読

み始めた。この書籍を読み進めている際に、今後は、音楽理論の主要なジャーナルを定期購読していこうと思った。まずはジャーナルの候補を見つけていく。

音楽理論家の仕事から得られるものは多く、彼らの仕事は、作曲実践を豊かにしてくれる有益な観点を無数に提供してくれる。ジャーナルの購読は今すぐにではなくてよく、もう少し吟味してから購読を開始していきたい。

過去の研究から先端的な研究まで、学べることはすべて学ぶ。音楽理論をこれほどまでに強く学びたいという気持ちは、インテグラル理論や発達理論を学んだ時のものに匹敵するか、それらを凌駕するほどである。

昨日の日記と今朝方の日記で言及したように、創造的狂気を抑圧することをもうしない。私は日本にいないのだし、日本に戻る気もないのであるから、そうした狂気を抑圧する必要などないのだ。

音楽理論の専門家を遥かに凌ぐ知識を近い将来に獲得し、過去の偉大な作曲家の曲を全て参考にするような気概を持って実践を継続していく。全ては、自らの霊性を具現化させる曲を作るためであり、自他の霊性に命を吹き込むためである。それを実現させるために私は学び続け、曲を作り続ける。今、それを祝福するかのように、突然あられが天から降ってきた。フローニンゲン:2019/1/28 (月)19:56

No.1622: A Morning Festival

It is beautifully sunny today, and I feel as if I would go to a festival. Groningen, 11:44, Tuesday, 1/29/2019

3744. 小川に沈んでいく二人の友人

また新たな一日が静かに始まった。時刻は午前六時半を回ったところである。今日の最高気温は4度、最低気温はマイナス2度とのことであり、それほど厳しい寒さではない。また、一日を通して今日は晴れのようなから、昼食前に散歩がてら近所のスーパーに立ち寄りたいと思う。太陽の光を浴びれる時には、できるだけそれを享受するようにしたい。

いつもと同じように、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、とても穏やかな雰囲気を持つ村にいた。そこには小川が流れており、小川の道には美しい草花が咲いていた。私は、そこはどこか天国のような場所だと思った。どうやら私は、小旅行としてこの場所を訪れているようだった。

見ると、私の横には、小中高を通じて付き合いのある友人が一人いた。彼と小川の道を歩きながら少しばかり話をしていると、お互いにふざけあい、私は彼を小川の方に向かって押してみた。それはふざけて小川に突き落とすほどの勢いであり、案の定、彼は小川に落ちた。その小川は浅そうに見えていたのだが、なんと、彼はみるみるうちに小川の底へと沈んでいってしまった。

それを見た私は、まずいと思い、すぐさま自分も小川に向けてジャンプして、小川の水面に手だけ出している彼の手を取ろうとした。すると、もうその時は時すでに遅しであり、彼の体は完全に川底に沈んでいってしまった。そこで私は川に潜ってみたのだが、彼を救出することはできなかった。どういうわけか、私はすぐさま川の水面まで戻ってくることができ、川岸に上がった。

「まずいことになったな・・・」と思って、しばらく川岸で茫然としていた。すると、私の後ろから、私を呼びかける声があった。振り向くと、なんとそれは、今川の底に沈んでいったはずの友人だった。

友人(YU):「危なかった～。なんとか助かったよ」

幾分笑みを浮かべながら、友人はそうに述べた。どうやって助かったのかを聞いてみると、川底付近に水路があり、その水路の流れに乗って、反対側の小川に出ることができたそうだ。

何はともあれ、私は友人が無事であったことを心から喜んだ。私たちは立ち上がり、再び歩き始めようとした。すると、その友人は突然、別の友人に変わった。今度の友人は、学年でも極めて運動神経が良く、私の親友でもあった。彼に、先ほどの一件について伝え、「そんなことがあるのか」と驚いていた。

私たちは、またしても川岸でふざけ始め、私は今度もまた、その友人を小川の方に向かって押してしまった。今度の押しはそれほど強くなかったのだが、その友人は悪ふざけをし、自分から小川の方にジャンプした。彼の運動神経の良さを考えると、全く問題ないだろうと思っていたのだが、彼もまた川底に

引っ張られるようにして、みるみる体が沈んでいった。手だけが水面に出た状態になった時、私は
またしても「これはまずい」と思い、彼を救出するために川の中に飛び込んだ。

だが、今度もまた彼を救出することはできなかった。再び私は川岸に上がり、そこでまた「今度はだ
めだったかもしれない」と思っていた。すると、今回もまた、後ろから私を呼ぶ声が聞こえてたので振
り返ってみると、今川に沈んでいった友人だった。私は彼の姿を見て安堵したのだが、「死にそうに
なったじゃないか」と彼は怒りながら述べた。彼の手元を見ると、小型マシンガンがあり、その銃口は
私の方に向けられている。

私:「悪いのは、あの政治派閥さ」

友人(HO):「そうだ、彼らが悪いんだ」

小川に突き落とした私を責めていた友人は、私が今回の件はある政治派閥のせいだと述べたところ、
ころりと考え方を変えて、そちらの方に意識が向かっていた。その政治派閥は、東欧のある国で
勢力を握っており、彼らの旧態依然とした発想は何かと問題視されていた。すると、偶然ながら、そ
の政治派閥のメンバーたちが、ぞろぞろと川沿いの道を歩いてくるのが見えた。

私:「あっ、彼らだ！」

私がそのように叫ぶと、友人はそちらの方を見て、政治派閥のメンバーたちに向かってマシンガン
を乱射し始めた。銃弾が彼らに当たることはなかったが、彼らは相当に怯えているようだった。そこ
で夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/29(火)06:54

No.1623: A Beautiful Winter Flow

Every day passes by like a ceaseless flow. I felt it today, too. Groningen, 17:56, Tuesday,
1/29/2019

3745. 自分にとって最適な就寝時間

時刻は午前七時に近づいている。昨夜は就寝前に、シャブリエとバルトークの楽譜を眺めながらリラックスをしていた。優れた楽譜を眺めることは、絵画鑑賞と同じような作用を心身にもたらしていることがわかる。そこには、小さな治癒と変容の作用がある。

一日の最後に楽譜を眺めるというのは習慣にしてもいいかもしれない。確かに、他の時間にも休憩がてら楽譜を眺めることができれば理想だが、日中はついついその他の仕事に取りかかってしまうことが多い。そうしたことから、とりあえず今は、就寝前にくつろぎながら楽譜を眺めることにしたいと思う。ここ最近では、九時半を過ぎたあたりから就寝に向けての準備を始め、十時には就寝するようにしている。

これまでよりも15分から20分ほど早く床に入るような日々が続いており、これもまた日々の心身の状態を整えているように思う。確かに、10:15や10:20から床に入るのも十分に早いのもかもしれないが、それよりも少し就寝時間を早めると、目覚めた時の調子になお一層良いものになっていることがわかる。おそらく自分にとっての最良の就寝時間は、十時なのだと思う。今日もその時間には就寝しておきたい。

今日の目覚めは五時半過ぎであったが、大抵はその時間かないしは六時ぐらいに起床して、そこから夜の九時半まで自分の取り組みに従事することが日課となっている。一つ一つの取り組みが、自分のライフワークと完全に合致しているものであるためか、早朝から夜のその時間帯まで活動に従事してもほとんど疲れることはない。

もちろん、一つの活動だけに従事していると集中力が切れてしまい、疲労感も蓄積しやすいのだろうが、私の場合は幸いにして、実践領域が複数にまたがっているため、様々な実践を横断していると、集中力が保たれたまま、それでいて疲弊することなく一日の最後の時間まで活動を続けることができる。ただし、一日の最後の時間帯になると、さすがに書物を読むほどの集中力は残っていないことは確かである。そうしたこともあり、読書は就寝前の時間帯以外で行うようにしている。

今日は午前中の早い時間帯から、協働者の方々とのオンラインミーティングがある。今日はある意味、キックオフミーティングであり、これからまた新しいプロジェクトが始まる。このプロジェクトは、三

年ほどの期間をかけて取り組むことを予定している。三年という期間をかけて一つのことに取り組めるとするのはとても有り難いことであり、人間の発達と同様に、ここからの三年間において、プロジェクトも発達をしていこう。その支援をし、プロジェクトが発達していく姿を見届けることができれば幸いだ。

今日もまた、作曲理論の学習と作曲実践を旺盛に進めていきたい。作曲理論の学習と作曲実践は、人間発達の探究に他ならず、この世界に対する奉仕活動の一環に他ならない。それは直接的・間接的に、自他の変容を促すものであり、人間の発達、とりわけ霊性の発達の探究と密接に関わったものである。今日も思う存分に、作曲理論の学習と作曲実践に従事していきたいという思いで一杯だ。フローニンゲン:2019/1/29(火)07:16

No.1624: A Spreading Sense of Fulfillment

I'll end today with a sense of fulfillment. I convince myself that tomorrow will also be filled with a sense of fulfillment. Groningen, 21:27, Tuesday, 1/29/2019

3746. 固有の観点と盲点:前超の虚偽

天気予報の通り、今日の天気はすこぶる良い。晴天に恵まれた今日は、どこか祭に出かけていくような気持ちにさせてくれる。

冬の優しい太陽の光が地上に降り注いでいる。そうした太陽の光を、昼食前にスーパーに足を運んだ際に存分に浴びることができた。明後日もまた天気が良いようなので、行きつけのチーズ屋に足を運ぶことが楽しみだ。

今日は午前中に、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングを行った。また一つ意義のあるプロジェクトが動き出したことを有り難く思う。

今年の夏から私は生活拠点を変えようと思っており、その前後は少し慌しくなるかもしれない。また、秋から再び大学院に通うことになると、大学院での探究に時間を充てていく必要がどうしても出てくる。そうしたことを考慮に入れて、来季にどれだけ協働プロジェクトを引き受けるかを判断していきたいと思う。

今日のミーティングを通じて思ったが、固有の観点があるということは、同時にそれは固有の盲点があることを意味する。何かしらの協働プロジェクトに関与させていただく際には、こちらの固有の観点を基にプロジェクトを前に進めていくことが必然的に多くなるが、自分の観点に潜む盲点に対しても絶えず意識を持つておく必要があると改めて感じる。

今回は、複数の関係者の方々と協働させていただくことになっており、それが功を奏して、自分の盲点に気づかされるような体験を本日した。様々な関係者と協働することの意義の一つは、まさにこの点にあるだろう。お互いの観点を場に提供し合い、それらの盲点に意識を当てながら、観点をより洗練されたものにしていく。こうしたことは、協働を進めていく上で非常に基礎的なことでありながらも、極めて大切なことだと改めて思う。

ミーティングが終わり、スーパーから帰ってきて昼食を摂っている最中に、インテグラル理論における基礎的な概念である「前超の虚偽」についてぼんやりと考えていた。ふと、幼児の落書きと後期のピカソの絵を混同してしまうことは、前超の虚偽という概念を分かりやすく伝える例だと思った。

後期のピカソの絵を、無価値な落書きのようなものとみなしてしまうことは、超越的なものを低次なものだとみなしてしまうことであり、幼児の落書きをピカソの絵のように高度な芸術性が体现されたものだとみなしてしまうことはその逆である。これは笑い話のように聞こえるかもしれず、二つの絵を混同するはずはないと思いがちかもしれないが、実は私たちは至る所で、形を変えてこの種の前超の虚偽に陥っている。そうした例は枚挙にいとまがないため、ここでは具体的な例を挙げることをあえてしない。

成人発達理論を通じて、高度な次元について学ぶのは良いが、その理解を精緻なものにしていかなければ、低次のものを高次のものと混同してしまう誤解がより増してしまうだろう。そのようなことを考えていた。フローニンゲン:2019/1/29(火)14:51

No.1625: A Winter Balancing Toy

I've recently thought that winter is like a balancing toy to keep balance. I assume that it might become cold again. Groningen, 11:52, Wednesday, 1/30/2019

時刻は午後の八時を迎えた。これからゆっくりと、一日を締め括る活動に従事していきたい。具体的には、本日最後の作曲実践をし、その後時間があれば、いくつか気になる作曲家の楽譜を眺めたい。昨日の日記で書き留めていたように、絵画作品を眺めるかのように楽譜を眺めていく。あえて分析的な視点で眺めてみたり、あえてぼんやりと楽譜を眺めてみたりする。

以前、ハーバード大学教育大学院で教鞭をとっているシャリー・ティシュマン教授の“Slow Looking: The Art and Practice of Learning Through Observation (2018)”を読んで学んだように、対象とゆっくりと接するような実践を意識する。それは絵画作品や楽譜のみならず、他の諸々の事柄にも当てはまるだろう。また、そもそも対象とゆっくり接するための時間的・精神的ゆとりというものも日々の生活の中に確保しておくことが大切となる。本来は、それを確保するというよりも、四六時中ゆとりを持っておくことが、自らの固有の人生を真に深く生きていくことにおいては不可欠である。ただし、現代社会においてそうしたゆとりを絶えず持つことが難しい場合もあるであろうから、できるだけゆとりを持った生活を心がけるようにすることが賢明だろう。

日々が滞りのない流れのように過ぎていく。今日もそのようなことを感じる一日であった。

優しい時間の流れを絶えず感じながら本日を過ごしていたように思う。いつも驚くが、いつの間にやら一日が始まっており、いつの間にやら一日が終わりに向かっているということに気づかされる。また、そもそも自分が今日という一日を体験できたということ、つまり今日という一日を生きていたのだということを改めて考えてみると、非常に不思議な感覚がする。今日を生きていたということに対する純粋な驚きと畏怖の念がここにある。

ここ最近では、年度末のため、諸々の請求書を作成したり、新たな契約を結ぶ際には契約書を作成する必要に迫られている。それらの作成に手間取ることは全くないのだが、今の時代にまだ紙媒体の契約書が存在していることに驚く。

おそらく今から数年、ないしは10年ほど経った時に、紙媒体の契約書をやり取りしている時代があったということを知って驚く世代も出てくるだろう。すでにいくつかのブロックチェーン技術にはスマートコントラクトが実装されており、それを用いれば紙媒体の契約書など不要だろう。紙媒体の契約書

はどうしても改ざんのリスクがつきものであり、スマートコントラクトを活用すればそれを限りなくゼロに抑えることができる。ブロックチェーン技術が早く世に受け入れられ、スマートコントラクトを実装した技術が広く社会の中で活用される日が来ることを願う。フローニンゲン:2019/1/29(火)20:32

No.1626: Brightness within Forlornness

A dark night has come when I realized it. I can find brightness within forlornness. Groningen,
18:10, Wednesday, 1/30/2019

3748. 霊性と死

今朝は六時過ぎに起床した。時刻は午前七時を迎えようとしており、これからゆっくりと一日の活動を始めようと思う。

昨日も一日が充実感のうちに終わったのを覚えている。今日もまた、充実感が滲み出すような一日になることが確信される。

絶えずこの道を歩いていこうという思いを、毎朝必ず持つ。そして、明日もまたこの道を歩いていこうという思いを、毎晩必ず持つ。

絶えず道を歩くことが自分の人生になった。それはこれからも続くだろう。

その道の果てについて、最近考えることが多くなった。昨夜も、そして今朝方も、私はいつか霊性の探究のみならず、死という現象についても探究を始めるだろうと思っている。霊性は、人間にとって不可欠な特性であり、死という現象もまた私たちにとって不可避な現象だ。

起床直後に歯磨きをしている時、もし仮に自分にとって大切な人がこの世を去ったら、私はもはや今のような生活をしないだろうと考えた。きっと、全てを日記の執筆と作曲実践に捧げるような日々が始まるに違いない。喪った人が消えてしまわないように日記を書き続け、曲を作り続ける。喪った人が住む世界に到達するほどの量の日記と曲を生み出し続けるに違いない。人はそれを狂気と呼ぶかもしれないが、果たしてそうなのだろうかと思う。喪った人を弔うことは決しておかしいことではなく、喪った人を送り出すことは決しておかしいことではないだろう。

吊いと送別として、日記と曲を絶えず作り続けるような日がいつかやってきそうな気がしている。その日が来れば、今のような微々たる量の日記を執筆することも、微々たる量の曲を作ることもなくなるだろう。

大切な人を喪ってから自分の中でようやく何かが始まるというのは、幾分不幸であるかもしれないし、それは必然であるようにも思う。何かが終わってから何かが始まるというのは、人間にとっての宿命なのかもしれない。この宿命を受け止めながら、これからの人生を過ごすことになるだろうことが想像される。そのようなことを早朝に考えていた。

午前七時を迎えた今は、闇が辺りを包んでいる。ただし、ここ最近では夜が明けるのが早くなったため、あと一時間以内に日が昇るだろう。

今日から四日間ほど雪が降る日が続く。今日は夕方から雨ないしは雪が降るようだ。幸いにも、来週の初旬は晴れの日が続くようなので、どこかの日に、街の楽譜屋に足を運び、そこでオランダの作曲家を中心に何か楽譜を購入したいと思う。

霊性の探究と、死という現象に関する探究。死と世界観の変容、そして死と霊性がテーマになるだろうことを再度思う。私たちにとって不可避な死というのが一体どういうものなのかについて、学校では何も教えてくれない。死という現象は、霊性や投資と同じで誰も教えてくれないのだ。重要なことは、全て自分で学んでいく必要がある。大して大切ではないことが学校で教えられ、大切なことが学校では教えられないということは、とても嘆かわしい。今日もまた、生きていく上で本当に大切なことを自ら学んでいこうと思う。フローニンゲン:2019/1/30(水)07:14

No.1627: Fragments of Depression

I had fragments of depression inside myself in the early morning. Groningen, 10:02, Thursday, 1/31/2019

3749. オランダが舞台となる二つの夢

明後日から二月を迎えようとしているフローニンゲン。春の足音はまだ聞こえてこず、むしろ二月は一番寒さが厳しい月になるだろうと予想される。三月を迎えれば、少しずつ春の足音が聞こえ始め、

その足音に冬の香りが残っているような日々がやってくるだろう。季節も人生も、少しずつどこか遙か彼方の場所に向かって進んでいるのがわかる。森羅万象が向かうその場所に向かって、今日もまた小さな歩みを続けたい。

一日の活動を本格的に始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、オランダ国内のある都市に観光に行き、何の目的もなしにその街を歩いていた。

一旦バスに乗り、しばらくバスに乗って、駅に向かおうとしていた。すると私は、降りるバス停を間違えてしまい、次にバスが停車する場所で降りた。そこから歩いて駅に向かおうとしていたところ、前方に馴染みのある顔が見えた。見ると、小中高時代を共に過ごした女性の友人(NI)がそこにいた。

彼女は、こちらに向かって歩いていたのだが、どうやら足を骨折しているようであり、松葉杖をついていた。私たちは道の真ん中で偶然の再会を果たし、そこで少しばかり立ち話をしていた。どうして足を骨折したのかを含め、足の骨折については何も尋ねなかったが、歩きづらそうにしていたことは確かなので、私は荷物を持とうかと述べ、それに続けて、肩を貸そうかと述べた。それに対して彼女はお礼を述べ、私に荷物を預けた。

その瞬間、道の向こうから一台のトラックがやってきた。私たちは歩道の上に立ちながら、そのトラックを見つめていた。すると、そのトラックは私たちの横に停車した。見ると、運転手は高校時代の友人であり、彼は親切にも、私たちを目的地まで乗せてくれるという。

車内には、もう一人高校時代の友人がいて、彼に席を動いてもらう形で、まずは彼女を後部座席に乗せ、私はその横の列の席に腰掛けた。いざトラックが発進するか否かのところで夢の場面が変わった。次の夢の場面でも、またしてもオランダが舞台であった。私は、今度は小中高時代の別の女性の友人(YY)に対して、フローニンゲンの街を案内していた。

歴史を感じさせてくれる街並みや、モダンさを感じさせてくれる街並みを眺め、さらには街を取り囲む運河を眺めたりしながら、あれこれと話をしながら歩いていた。彼女もまた、オランダ国内の別の街に住んでいるようであったから、今度はそちらの街を案内してもらうことになった。終始平穏な感覚に包まれながら、夢が終わりへと向かっていった。今朝方はそのような夢を見ていた。

どちらも共にオランダが舞台となっていたことは興味深い。これまでオランダ国内が夢の舞台になることは一度もなかったように思う。フローニンゲンで生活を始めて三年になるが、三年の月日が経って初めて、自分の中にオランダの土地を司る何かが流れ込んできたのかもしれない。ある土地と深層的な出会いを果たすのには時間がかかるのだろう。オランダという国に宿る土着神、さらには、フローニンゲンという街に宿る土着神との関係性を、引き続きゆつくりと深めていこうと思う。フローニンゲン:2019/1/30(水)07:37

No.1628: Cheerfulness & Calmness

Although the level of my energy in the early morning was not so high, I guess I regained my energy now. Groningen, 11:45, Thursday, 1/31/2019

3750. 不朽のものにするために

先ほど、先日作った曲を聴き返していた。いつも早朝の作曲実践を始める前に、過去に作った曲を数曲ほど聴くことを行っている。曲を聴きながらふと、現代人の自分が過去の作曲家が作った曲に範を求め、それを参考にして曲を作ることは、彼らの曲を現代の中で生き返らせることにつながりはしないだろうかと考えていた。ここでもやはり、死と蘇りが主題として立ち現れている。ないしは、死と永遠の主題が見え隠れしている。

私が彼らの作品に範を求めているのは、それはもちろん、彼らの作品から学び、自らの作曲技術を高め、作曲実践そのものをより豊かなものにしていくためである。だがそれ以外にも、彼らが創造したものに対して敬意を表し、彼らの作品をさらに永遠のものとするために、彼らの作品を参考にしながら曲を作っているようにも思える。言い換えると、現代という文脈の中で生きる自分が彼らの曲を参考にして新たな曲を作ることによって、彼らの曲をまた別の次元で不朽のものにしていく試みに従事しているように思えるということだ。同時に、彼らの作品そのものだけではなく、自分が生きた証を永遠のものにするために曲を作っているようにも思える。私たちの生は永遠でありえないが、私たちが生きた証は永遠のものになりうる。それは自らの生きた証に関しても同様だ。

現代人の多くは、自らの人生を生きることを放棄している。自らの人生が他者や社会によって作られていることに抗うかのように、私は日記や作曲を通じて自分の人生を必死に形作ろうとしているの

かもしれない。自らの人生を他者や社会によって作らせてはならない。自分で自分の人生を創造していくことが大切だ。そのために日記の執筆があり、そのために作曲実践がある。自分という一人の固有な人間の固有な人生を創造し、それを生き抜きたいと私は思っているのだろう。

そうした思いが、日々の日記の執筆と作曲実践に向かわせている。日々の一つ一つの営みが、有限性や永遠性という主題と密接に結びついていることがわかる。またそこには、人生と創造という主題も横たわっている。これらの主題を探究していくために、毎日の日記の執筆と作曲実践があるのだろう。

今日はこれから、協働者の方々とのオンラインミーティングがある。厳密には、協働先の会社が主宰するイベントに登壇させていただく。テーマは、若手社員の挑戦と成長である。他のゲストスピーカーの方々とのやりとりや、会場の皆さんとのやり取りをととても楽しみにしている。

今日は昨日と連続していながらも、昨日とは異なる喜びや充実感を感じられる一日になるだろう。午前八時を迎えたフローニンゲンは、すっかり夜が明けた。これから始まる一日が楽しみであり、この日を生きれたことに感謝の念を捧げたい。楽しさという感情と感謝の念が、自分をどこか遠くの世界に連れて行ってくれるように感じる。フローニンゲン:2019/1/30(水)08:12

No.1629: An Exquisite Sunset

Even though it was sunny today, I missed the sunset. Once I close my eyes, I can see an exquisite sunset. Groningen, 17:45, Thursday, 1/31/2019

3751. 輝く世界の中で

時刻は午前11時を迎えようとしている。午前中の穏やかな太陽の光が地上に降り注いでいる。

冬が一旦中休みを挟んでいるかのようにあり、昨日に引き続き、今日もまた太陽の優しい光を浴びることができている。天気予報によると、夕方からは雨か雪が降り始めるようなので、今はできるだけ太陽の光で輝く世界を眺めておきたい。

つい先ほど、オンラインを通じて登壇させていただいたイベントが終了した。ゲストとして招かれたお二人から様々な気づきを得ることができ、参加者の方々からの質問にも色々と考えさせられることがあった。

人として生きることはいかなることなのか、自分の人生とは一体何であり、自己は何者であるかを問わない日はない。そうした日々の中で、今日のように、何かしらの形で他者や社会と接点を持つことは非常に重要なことであり、尊いことだと改めて思う。

今、書斎の窓から見える景色をぼんやりと眺めている。いついかなる時も、私の目の前にはこの景色がある。目の前には絶えず何かしらの輝きを持つ世界がある。景色や世界の美しさに気づくためには、ゆとりを持ち、一度立ち止まってみるのがいかに大切か。前進のみではなく、立ち止まるからこそ見えてくる美しい景色があることを忘れてはならない。

それは私たちの人生においてもそうだろう。そして、成長や発達に関しても同じことが言えるだろう。今日も立ち止まりながら、人生の様々な景観を味わっていくことにしたい。

この冬が終わる頃には、何か人生が新たに開かれていくのではないかという予感がある。ここ毎年、冬に同じことを感じ、実際に春からは人生が新たな側面を見せながら動き始める。今年もまたそれを経験するだろう。太陽の穏やかな光が降り注ぐ景色を眺めながら、そのようなことを思う。

今日はこれから作曲実践を行いたい。早朝にオンラインのイベントがあったため、今日はまだ作曲実践ができていない。今から一曲ほど曲を作っていきたいと思う。

ここ最近に興味深いことに、季節が厳しい冬を迎えているにもかかわらず、曲は明るい雰囲気を持つものになっている。自然と長調のいずれかのキーを選択している自分がいる。この点に関しては様々な見方ができるが、今の自分を最も正確に表現しているであろうことは、厳しい冬の中に固有の輝きを見出しているのではないかということである。寒く、鬱蒼とした雰囲気を持つオランダの冬に身を置く中で、そうした冬の中に光るものを見出すことができている。

今の私は、おそらくそうしたものを形にしたいのだと思う。そうした感覚を喚起させてくれる場所からの恩恵を受けながら、これから作曲実践を楽しみたい。フローニンゲン:2019/1/30(水)11:14

今朝は六時過ぎに起床し、六時半を過ぎた頃に一日の活動を始めた。てっきり今日は金曜日だと思っていたのだが、私の早とちりで、今日はまだ木曜日のようだ。曜日の感覚がますます消失していく。

一日の活動を始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、友人(YU)の自宅の庭にいた。その庭は広く、そこで私は友人と立ち話をしていた。なにやら、友人が私のために、鍬(くわ)を作ってくれることになった。「お土産としてオランダに持ち帰って使って欲しい」と友人は述べた。

鍬の使い所はそれほどないと思っていたのだが、そういえば、鍬を使って畑でも耕すか、あるいは、家に護身用に飾っておこうかと思った。いずれにせよ、あまり大きな鍬はいらないと友人に伝えた。すると、友人はかなり大きな鍬を作ろうとしてくれていたようであり、私のお願い事項に少しばかり残念がっているようだった。とはいえ、鍬を含め、日用品を作ることに喜びを見出している友人は、早速、鍬を作ることに取り掛かってくれた。

オランダに持ち帰るためには小さな鍬である必要があったため、私は鍬の取っ手の部分の木の大きさに注意を払っており、友人が丸太に線を入れようとしている時に、自分の好みのサイズを伝えた。友人はしゃがみ込んで丸太に印をいれると、私たちの横に、中学生ぐらいの女の子がやってきた。どこかで見たことのあるような顔だったが、名前を思い出すことができなかった。彼女は私たちのために、今から朝食を作ってくれるとのことであった。

友人がオムレツをお願いすると、それは作れないとのことであり、私は焼き魚と卵焼きを注文した。少女はうなづき、笑顔でその場を去り、朝食の準備に向かった。そこで静かに夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は大学時代を過ごした街に似たような場所にいた。時刻はちょうど昼食どきであったから、中華料理でも食べようかと思い、レストラン街を歩いていた。中華料理店の前に辿り着くと、結局中華料理よりも、スーパーで色々とお惣菜を購入した方が良いような気がしたので、私は近くのスーパーに向かった。スーパーに到着し、そこであれこれと品を選んでいると、偶然にも、

二人の知人とであった。一人は男性であり、もう一方は女性である。女性の方は何か飲み物を選んでおり、男性の方はアイスクリームを選んでいた。

私は二人に挨拶をし、飲み物コーナーに行き、まずはお茶から選び始めた。次に食べ物を購入しようと思っていた矢先、私は瞬間移動して、あるヨガスタジオにいた。そこにいたのは、私がサンフランシスコ時代にヨガのインストラクターの資格を取得した仲間たちであった。どうやら、今から仲間のうちの一人のクラスが始まるらしかった。

私は彼女のクラスに参加することを楽しみにし、準備を始めた。ほどなくしてクラスが始まると、その場には15人ほどの参加者がいて、まずは簡単に自己紹介することになった。そこには私以外にも一人だけ日本人がいて、彼は私の友人(HY)だった。自己紹介が始まった時、私の横にいたアメリカ人の女性が変わった名前だったので、私は自己紹介する時に、なぜだか自分の本当の名前を述べるのではなく、「Ase(アセ)」だと述べた。

私の頭の中には、「汗」という漢字が浮かんでおり、なぜだかそれをそのままローマ字読みしたものを自分の名前として名乗った。自己紹介が一通り終わると、クラスが始まった。

クラスの途中で、鋤(すき)のポーズをする場面があり、私の友人は、壁を補助として活用し、壁に足をつける形でそのポーズを行っていた。私はこのポーズを好んでおり、なおかつ自分はヨガのインストラクターの資格を取得していることもあって、このポーズをどのように行えばいいのかを知っていたのだが、友人が起き上がり、私にそのポーズのやり方を教えてくれるという。

いざ私が横になり、そのポーズを始めようすると、あれこれと注意してきた。しまいには、私の体を強引に修正しようとし始め、大変迷惑に思った。このポーズを一生懸命私に教えてくれようとする友人にお礼は述べたが、それに合わせて、このポーズは自分のペースでやらせて欲しいということも伝えた。フローニンゲン:2019/1/31(木)07:12

No.1630: A Song of Powder Snow

A fine snow is falling from the sky. It seems to sing a song. Groningen, 10:41, Friday, 2/1/2019

今朝は起床してしばらくすると、少しばかり心身に淀みを感じた。昨日少しばかり遅く就寝したことが影響をしたのか、冬の中休みの変化が影響を与えたのかわからないが、そうした状態にあった。そのため、先ほど20分ほど仮眠を取った。仮眠を取ることによって随分とスッキリしたので、これから本格的に一日の活動を始めていく。

今日は最高気温が3度、最低気温はマイナス2度とのことである。これくらいの気温であれば、寒さはそれほど感じない。

一昨日、近所のスーパーに買い物に出かけた時、いつも購入しているオーガニックのリンゴが品切れであった。私のちょうど近くに、これから棚に並べる予定の果物が、何段かのカートの中に入っているのが見えた。その中にはリンゴもあり、私はカートの中を覗き込んでいた。すると、店員に声をかけられ、オーガニックのリンゴがあるかどうかを尋ねてみた。

その男性の店員は、親切にも店の奥へと向かっていき、しばらくすると、笑顔を浮かべながら戻ってくる姿が見えた。彼は、手に持っていたリンゴを持ち上げるようにして、私に合図をした。幸いにも、いつも食べているオーガニックのリンゴが倉庫にあったようであり、私はその店員にお礼を述べた。リンゴがあったことを嬉しく思ったのか、私は笑顔を浮かべながら、随分と大げさにお礼を述べていたように思う。すると、店員はさらに笑顔になった。そのようなやり取りをしていたことをふと思い出した。

笑顔を生み出すこととそれを共有すること。そして、幸福を共有すること。それはとてもシンプルなことでありながら、とても大切なことのように思える。

私はリンゴを受け取ったことが嬉しく、そして幸福だった。その喜びと幸福を素直に表現し、それを共有したにすぎない。そうしたシンプルなことが人間として生きていく上で大切なのではないかと思う。

今日はこれから、過去の日記を少しばかり編集したい。編集作業も着実に進んでおり、ここ数日間で要領をかなり掴んだため、編集のペースが随分と上がっている。あと数日間ほどこのペースで編

集を進めていけば、来週末までには、未編集のものがすべてなくなるのではないかと期待している。ひとたび未編集の日記がなくなれば、そこからは、もう未編集の日記をためないように、適宜編集作業を行っていくことにしたい。

日記の編集が終われば、今日最初の作曲実践を行う。ここ最近は毎晩、モーツァルトに範を求めていたのだが、昨夜は作曲実践を行わなかったので、今日はまず、モーツァルトに範を求める。その後再び過去の日記を編集し、時間を見て、昼食前に再度作曲実践を行いたい。今日は特に、日記の編集と作曲実践に注力していこうと思う。フローニンゲン:2019/1/31(木)08:33

No.1631: Winter Courage

Because it snowed in the morning, the outside world became a winter wonderland. I can obtain courage from such a world. Groningen, 16:43, Friday, 2/1/2019

3754. 創造エネルギーの減退と回復

時刻は午後の三時半を迎えた。一日も折り返し地点に差し掛かった。

今日はこれまでのところ、過去の日記の編集に力を注いでいた。編集の勘所を掴み、ここ数日間はかなり量の編集を行うことができています。本日もすでになんかの量の編集を行ったが、今日はまだ時間があるので、編集を進めていきたいと思う。今朝は起床してしばらくすると、憂鬱さの破片が自分の内側に存在している感覚があった。それが影響してか、作曲を行うエネルギーがあまり沸いてこなかったが、一時間ほど過去の日記を編集していると、創造エネルギーが湧いてきた。日記の編集によって思わぬ形で創造エネルギーを得ることができたことは興味深い。

そもそも自分の日記は、過去の自分が創造エネルギーを発揮して生み出した産物であり、一旦文章の形になったとしても、そこにはまだ創造エネルギーが生き続けているのではないかと思います。それゆえに、過去の日記を読み返すことによって、創造エネルギーが自分の内側に注入されたという現象が起きたのかもしれない。今は幸いにして、創造エネルギーが通常通りとなった。これから夕方の作曲実践を行い、その後また過去の日記の編集を行いたいと思う。

先ほど改めて、健全な自己批判と適切な自己矯正の大切さについて考えていた。それらは共に、発達や学習にとって不可欠な要素である。探究活動と創造活動を普段行う際には、常に健全な自己批判と適切な自己矯正が働いているかを確認したい。それらがなければ、何も深まっていけないだろう。

今日は午後に太陽の光を随分と浴びることができた。もちろん、外に出て直射日光を浴びたわけではなく、書斎の中に降り注ぐ太陽の光の暖かさを感じていたことに留まる。何よりも、太陽の光が目に見えることそのものが、どれほど自分に活力を与えてくれることか。本日の最高気温は3度であるが、全く寒さを感じない。それも太陽の光のおかげだと思う。

昨日、私が仮に今後博士課程に進学するとすれば、その際の探究テーマは霊性と死(ないしは死生観)に関するものになるだろうと改めて考えていた。そうしたテーマを扱うためには、何よりも自分自身をさらに深めていく必要がある。そうしたことを考えると、博士課程に進学するのは必然的にしばらく後になる。私が過去に師事していたオットー・ラスキー博士は二つの目の博士号を60歳を超えて取得しており、成人発達の大家の一人であるスザンヌ・クック=グロイター博士も60歳を迎えてから博士号を取得している。

別に彼らを意識する必要はないが、自分の関心テーマが霊性や死生観にあるのであれば、博士課程への進学を焦る必要は全くないことがわかる。それらのテーマを扱って博士論文が執筆できるまでに自己を深めていくことが先決だ。霊性と死生観については、これからゆっくりと探究を続けていく。フローニンゲン:2019/1/31(木)15:57

3755. 観察と振る舞いの変化

時刻は午後の七時半を迎えた。今日もまた、一日がゆっくりと終わりに近づいている。

昨日と同様に本日も、充実感を感じられる一日であった。確かに、早朝は少しばかり活動エネルギーの減退を感じていたが、午前中の早い段階で仮眠を取ったおかげもあり、それ以降は、活動エネルギーが回復していた。

今日はこれから、夜の作曲実践を行うのではなく、過去の日記の編集の続きを行っていきたい。せっかく今は、編集の流れに乗っているのであるから、この機会を逃すことなく、一気に編集を進めていく。この調子だと、明日か明後日には、未編集の日記がなくなりそうである。未編集の日記がなくなれば、それ以降は再び読書や作曲実践に多くの時間を充てることができるだろう。それを見越して、今夜はまた編集を続けていく。

今日は一日を通じて晴れていたにもかかわらず、夕日を見そびれてしまった。だが、目を閉じてみると、心の中で優美な夕焼けを眺めることができた。私たちは、いつでも夕日の輝きを眺めることができるのだ。

夕方に日記を編集している時に、量子は観察されることによって振る舞いを変えるということについて改めて考えていた。これは実に面白い現象である。量子には、人間とは異った形の意味があるのかもしれない。人間が観察をすることによって、量子の意思はそれに反応し、振る舞いを変えていく。

量子と同様に、私たちの自己も観察されることによって、振る舞いを多分に変えていくという性質を持っているだろう。自己を育てていくためには、何よりも観察をしてあげることが重要なのだ。言い換えると、自己に気づきの意識を与え、自己の振る舞いを変容させていくことが重要なのだ。

今このようにして書き留めている日記もまた、自己を観察するという大切な役割を果たしている。日記を書くことを通じて、絶えず自己に気づきの意識を与えて行こうと思う。そして、それによって新たに現れた振る舞いを観察し、再び自己を変容させていく。そのような循環的な気づきのプロセスがここにある。

明日は、もうほとんど日記の編集が完了しているだろうから、再び教会旋法や音楽理論に関する書籍を読んでいきたい。繰り返しそれらの書籍を読み、得られた知識を実際の作曲実践に活用していく。ここでも、作曲理論を学ぶ自己、および作曲実践をする自己を絶えず観察していくことが重要だ。その日に自分は一体何を学び、どのような実践を行ったのか。その実践を通じて、一体何が得られ、次に何を試そうと思っているのか。そうしたことを逐一言葉の形にし、それをさらなる自己観察につなげていく。

気づきの意識を与えられることによって、絶えず自己が振る舞いを変えていくのであれば、私の自己は随分と忙しく動いているかもしれない。しかし未だかつて、絶えず運動を続ける自己から悲鳴が聞こえてきたことはないため、まだまだ観察が足りていないのだろう。明日もまた、絶え間ない観察を行う一日となるだろう。フローニンゲン:2019/1/31(木) 19:47

3756. 今朝方の夢

今朝は六時半過ぎに起床し、七時あたりから一日の活動をゆつくりと始めた。早朝に少しばかり調べ物をしていると、気がつけばすでに時刻は八時半に近づいていた。すでに辺りは薄明るくなっており、これから一日が始まることを実感する。

近くから小鳥の鳴き声が聞こえてきた。小鳥の鳴き声が聞こえてきたのは久しぶりのことではないかと思う。

いつもの通り、まずは今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、前職時代の上司の方の自宅に訪問をすることになっていた。その方の自宅は一軒家ではなく、マンションであり、私はそこに向かっていった。程なくしてマンションに到着すると、そこはデザイナーズマンションのようであり、非常にお洒落な作りをしていた。

その方の部屋がある階に到着すると、そこには不思議な空間が広がっていた。どことなくそれはオフィスのように、その空間に一室一室居住用の部屋があるような感じであった。

私はその方の部屋を見つけ、いざ呼び鈴を押そうとした時に、隣の部屋から偶然にも、高校時代の友人(KA)が出てきた。まさかこのような場所で再会できるとは思っておらず、私はそこで少しばかり友人と立ち話をした。なにやら、トイレは部屋の外にあるらしく、部屋から出たのはトイレに行くためだったそうだ。

友人がトイレの扉を開けると、なんとそこには、私が今から訪問しようと思っていた方がいた。その方が、「申し訳ないけど、部屋の前でちょっと待ってて」と述べたので、私はそれに従った。すると、その方の部屋の隣の隣から、何人かの若い男性が外に出てきた。彼らもまたトイレに行くのかと思ったが、そうではなく、部屋の前に長いテーブルを出し、そこで絵を描き始めた。彼らが描いている絵

を眺めてみると、それは非常に上手く、何か風景画を描いているようだった。彼らに話を聞くと、彼らは皆、画家の卵とのことであった。彼らの描く絵を見ていると、廊下の奥に、不思議な扉があることに気づいた。

先ほどトイレに行っていた友人が再び私の横にやってきて、「扉の向こうには体育館がある」と述べた。私はおもむろに扉の方に行き、左横に設置されていたボタンを押して、扉を開けてみた。すると、ゆっくりと扉が開いていき、友人が述べるように、そこには本当に体育館があった。

私は少しばかり体を動かしたいと思い、ちょうど体育館に転がっていたフットサルボールを使って遊ぼうと思った。だが、体育館の空気の入れ替えが少しばかり必要だと思い、入り口とは反対側の扉を開けて換気をした。そのおかげで、新鮮な空気を取り入れることができたのだが、室内がどうも暑く、私は上半身裸になった。すると、続々と人が体育館にやってきて、見ると彼らは全員、小中学校時代の友人の男女だった。

しばらくしてから私は再び服を着て、みんなでバスケをしようと提案した。試合をする前に、各自で少し練習をすることになり、私は不思議なことに、地面を強く踏みしめてからジャンプをすると、驚異的なジャンプ力を発揮することが可能になっており、その力を活用すればダンクも容易であった。練習中に一度ダンクを試してみようと思ったところで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/2/1(金) 08:35

No.1632: Roaming Winter Shadows

I have a feeling that winter shadows are still roaming around. Groningen, 21:04, Friday, 2/1/2019

3757. 睡眠と活動エネルギー

薄い雲が空を覆っている今日のフローニンゲン。今日はどうやら、午前中に少しばかり雪が降るかもしれないようだ。しかし、昼前にはそれは止み、以降は曇り時々晴れのような天気になるらしい。今日の最高気温は2度であり、最低気温はマイナス1度とのことである。人間の環境適応力というのは面白いもので、今日の気温はとても暖かく感じられる。最高気温が2度というのは、全くもって厳し

い寒さではなく、最高気温がマイナスに陥る日と比べれば、寒さには雲泥の差がある。雪が止んだ頃を見計らって、昼食前に近所のスーパーに買い物に出かけたい。

一昨日は少々就寝時間が遅れてしまったが、昨夜は早めに就寝した。すると、やはり起床時の心身の状態がまるっきり異なることに気づいた。一日の活動を始めていく際のエネルギーの量がまるっきり異なるのである。活動に向けた意欲も極めて高く、そうした様子を見ていると、睡眠がいかに重要かということに改めて気付く。これからも、夜にあれこれと活動を続けていくのではなく、自ら設定した一日の活動を全て終えたら、速やかに就寝するようにしたい。今夜もそうしたことに気をつけていく。

一日分のコーヒーが出来上がったため、立ち上がってみると、早速粉雪が空から降ってきた。先日のような吹雪ではなく、本当に微量の粉雪が天からゆっくりと舞い落ちている。これくらいの量の雪であれば積もる心配はないだろう。粉雪が舞う様子を見ながら、一日の活動をこれから始めていきたい。

今日は昨日に引き続き、過去の日記を編集していく。昨日は随分と編集が進み、今日もそのペースで編集をしていけば、今日中に未編集の日記がなくなるのではないかと期待している。今日中に全ての日記を編集したら、今後は日記が溜まっていかなないように、適宜編集を行っていくことにする。今日編集が全て終われば、明日からは再び、作曲理論と音楽理論に関する書籍を旺盛に読み進めていくことができるだろう。

今日はこれから、早朝の作曲実践を行う。昨夜は作曲実践を控えていたこともあり、毎晩最後に作曲実践をする際に参考に行っているモーツァルトの曲をこれから参考にして一曲作る。今日も程よく作曲実践をしていき、主には過去の日記の編集に力を入れていきたいと思う。活動へ向けたエネルギーが非常に高まっていることを実感するため、今日も充実した一日になるだろう。フローニンゲン:2019/2/1(金)08:49

No.1633: Translucent Water Veins

This morning looks like translucent water veins. Groningen, 08:43, Saturday, 2/2/2019

時刻は午後二時半を迎えた。天気予報の通り、午前中から雪が降り始めた。それは最初、パラパラと天から降り注ぐ粉雪程度であり、「これくらいの雪であれば積もることはないだろう」と私は思っていた。ところが、しばらくして再び窓の外を眺めると、見る見るうちに雪が積もり始めていた。そしてしばらく仕事をしていると、辺り一面が白銀世界になった。昼食前まで雪が降っており、ちょうど買い物に行く前に止んだ。

近所のスーパーに買い物に向かっている最中に、まだ誰も踏んだことのない雪の上を通っていた。すると、雪を踏みしめるなんともいえない音が聞こえてきた。また、その感覚も独特なものがあつた。

まだ誰も踏んだことのない雪の上を歩いていくことは、どこか自分の人生を象徴しているように思えた。おそらくこれは、私の人生だけではなく、全ての人の人生にも当てはまることだろう。

私たちは皆、固有の人生を歩いていく。その道を歩いている時に見える景色や聞こえる音は当然異なる。そうした景色や音をどれだけ味わえるか。それがこの人生を生きていく上で大切になるだろう。

買い物から帰ってきて昼食を食べていると、通りを挟んで向こう側に見える赤レンガの家から二人の小さな子供が外に出てきた。男の子の方が兄のようであり、女の子の方が妹のようだった。兄は小さな自転車にまたがったままそこに止まっていた。一方、妹の方は、雪の積もった道路の上で、嬉しそうにクルクル回っていた。それはおそらく、世界が白銀世界と化したことに対する喜びの表現のようだった。

そうした可愛らしい様子を眺めながら、このように自らの身体を持って直に世界と接し、その喜びを身体を通じて表現することは極めて重要だと思った。現代社会は、ますますこうした機会を子供たちから奪ってしまっているように思えて仕方ない。子供の発達上何よりも重要なのは、まずはあの女の子のように、この世界に直に触れる体験をすることだろう。それが身体的感覚的な発達を促すのみならず、後々の知性の発達に大きな影響を及ぼす。その子の喜ぶ様子を眺めながら、そのようなことを思っていた。

今日も午前中に、集中的に過去の日記の編集を行っていた。午後からも引き続き編集を行っていけば、なんとか今日中に全ての日記の編集が終わるだろう。過去の日記を読みながら、そういえば、私は30年以上もリュックサックのことを「リックサック」だと思い込んでいた。いつかの夢の中でリュックサックが現れることがあり、その夢を後ほど書き留めている時に、「リックサック」という言葉はおかしいことに気づいた。

おそらく私は、その他にもまだ数多く言葉を間違えて覚えているものがあるに違いない。今後も日記を書き続けていく中で、徐々にそうしたものを発見していき、適宜矯正をしていきたい。それもまた、発達の原理である自己矯正の一種だと言えるだろう。フローニンゲン:2019/2/1(金)14:49

No.1634: A Little Bird's Warming-Up

A little bird is doing warming-up, changing its voices variously. Groningen, 11:37, Saturday, 2/2/2019

3759. この世界に真にあること:美的感覚の涵養

時刻は午後の七時半を過ぎた。気がつけば、今日から二月に入っていた。意識するまでそのことに気づかないでいた。二月は一年で最も短い月であり、この月が過ぎれば、少しずつ春らしさを感じることができるようになってくるだろう。

この時間帯になると、辺りはさらに静かになり、週末に向けての雰囲気をもより一層強めている。

本日過去の日記の編集が随分進んだことにより、明日の午前中にもう少しばかり編集を行えば、全ての未編集日記の編集が完了したことになる。それによって、明日の午後以降は、再び作曲理論や音楽理論の学習をする時間が増えるだろう。それがとても楽しみだ。

今日は午前中に雪が降ったため、辺りは夕方まで白銀世界の様子が続いていた。今はどうやら大部分の雪が溶けているが、明日もどうやらどこかのタイミングで雪が降るらしい。春を迎えるまでは、まだ雪が降る日が続くだろう。

今日もフローニンゲンで生きた日があったということに自覚的であること。何かそれが、とても大切なことのように思える。人は毎日生きていることを当たり前と思うかもしれないが、それにあえて自覚的になり、生きることそのものを毎日捉え直していくことが大切なように思える。それをするによって、私たちの日々は一段充実したものになっていくのではないだろうか。

ユングもまた、この世界に真にあるというのは、この世界にあることに対して自覚的である必要がある、ということを述べていた。そうなのだ。この世界に私たちが真にあるためには、この世界にあることに対して自覚的になっておく必要があるのだ。

決して、他者や社会によって仕掛けられた夢を無自覚に見ていてはならない。そうした夢を見続けている限りは、この世界にあることに対して自覚的になることはできないだろう。

とにかく目覚めておくこと。もしまだ目覚めていないのであれば、とにかく目覚めていくこと。そうしていかなければ、私たちは真にこの世界にあることはできない。

今日はこれからメールに返信をし、一日を締め括る作曲実践を行いたい。その際には、モーツァルトの変奏曲に範を求める。今回は何か応用的な技術を試すわけではなく、自分が美しいと思えるメロディーをできるだけ生み出すように意識する。美的感覚というのも人それぞれであることは以前の日記で書いた通りであり、自分の美的感覚は自分で養っていく。そのためには、自分が何に美を感じているのかをとにかく明らかにしていく。作曲においては、自分が美しいと思う曲の様々な特徴に意識を向けていく。また、作曲実践においては、自分が美しいと思える音をできるだけ生み出していくようにする。そうしたことを続けていけば、自分の美的感覚が徐々に磨かれていくだろう。美を司る感覚もまた、他の感覚と同様に発達していくものであり、美を司る知性領域があることを忘れてはならない。そして、それらは日々の学習と実践によって徐々に育まれていくものであることも忘れてはなるまい。フローニンゲン:2019/2/1(金)19:51

No.1635: A Winter Whistle

It seems to me that I can hear a winter whistle from the surrounding environment. Groningen,
17:14, Saturday, 2/2/2019

今朝は六時半過ぎに起床し、七時を迎えたあたりから一日の活動を始めた。辺りはまだ闇に包まれているが、土曜日の静けさをどこことなく感じることができる。

昨日は雪が降ったが、すでにその雪は溶けており、今日は一日を通して曇りとのことである。今朝方の夢をいつものように思い出そうとしてみたところ、あまり覚えていないことに気づいた。書きながら、できる限りのことを思い出したい。

夢の中で私は、大阪に在住していた時に知り合った知人の方と話をしていた。テーマはおそらく成人発達に関するものである。話をしていた場所は、どうやら私の書斎のようであり、私は、成人発達に関する何冊かの和書をその方にあげることにした。最初の夢に関して覚えているのはそのくらいしかない。その後の夢についてもあまり思い出すことができない。

今日は珍しく夢を想起することが困難だ。これは自分の無意識が落ち着いていることから起こっているのか、それともその他の要因によるものだろうか。いずれにせよ、今のところそれ以上の夢を思い出すことができない。書き留めたのはごくわずかであったが、そうしたごくわずかな量でもいいので、今後も毎日、覚えている範囲のことを書き留めるようにする。そのようにして夢の想起力は高まっていく。また、そうしたごくわずかな夢の断片であっても、何かしらの気づきや発見をもたらしてくれることを忘れてはならない。

一昨日より、ロシアの作曲家ニコライ・メトネルのピアノ曲を聴いている。五時間ほどのピアノ曲全集を今日も繰り返し聴くことになるだろう。メトネルについては、いつかの日記で言及をしていたように思う。先日までは、スクリャービンのピアノ曲を繰り返し聴く日々が続いており、今はメトネルがその対象となった。

ロシア的なものが少しずつ自分の内側に流れ込んでくるのがわかる。あるいは、自分の内側に、ロシア的なものに共鳴するような何かが育まれつつあるのを実感する。今はそれを静かに育てていく時期にあるのかもしれない。

メトネルは祖国を離れ、フランスに渡り、その後にイギリスに渡る中で作曲活動を行ってきたようである。一つ興味深いのは、そうした異国での生活を経た後に、晩年になってロシア人としてのアイデンティティに強く目覚めたことである。そのプロセスを自分の歩みと自然と重ねてしまう。メトネルの曲に関心を持っているのは、こうした実存的な体験を共有しているからなのかもしれない。

今日もまた作曲実践と作曲理論の学習を行っていく。メトネルの作曲様式は、後年になって精巧さと複雑さを帯びるようになったとのことであり、メトネルをもってしても、作曲様式の発達には長大な時間を要したことがわかる。それを念頭に置きながら、今日の学習と実践に励みたいと思う。フローニンゲン:2019/2/2(土)07:39

No.1636: Bilateral Character

In reality, all creation has multi-facedness rather than two-facedness. Groningen, 21:20,
Saturday, 2/2/2019